世界の幸せをカタチにする。
Creating Peace & Happiness for the World
Musashino University
武蔵野大学 学術機関リポジトリ
Musashino University Academic Institutional Repository

Preliminary Report on the Restoration Works of Ashibe-ya Annex Damaged by the 21st Typhoon in Japan, 2018

メタデータ	言語: jpn
	出版者:
	公開日: 2020-07-22
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 西本, 直子, 西本, 真一
	メールアドレス:
	所属:
URL	https://mu.repo.nii.ac.jp/records/1288

あしべ屋妹背別荘の台風 21 号災害復旧報告

Preliminary Report on the Restoration Works of Ashibe-ya Annex Damaged by the 21st Typhoon in Japan, 2018

西本　直子*1　　西本　真一*2
NISHIMOTO Naoko *1　　NISHIMOTO Shinichi *2

歴史的建造物の保存活用　木造　近代和風
明治大正期　御用邸　紀州徳川

１、はじめに

名勝和歌の浦[1]（和歌山市和歌浦中）に現存するあしべ屋妹背別荘[2]（芦辺屋別館[3]）は明治大正期に日本全国に名を馳せた会席旅館、あしべ屋の別館の建物[4]である。2012 年に危機的状況となり、その歴史的価値を調べては web 公開や周囲への認知を図る作業を行い、2014 年に名勝の主要な構成要素となった。春と秋に地元の祭を共催して意見交換を行い保存活用の活動を続けていたところ、2018 年に台風 21 号の高潮被害に遭った。床下の損壊や床上浸水の深刻な被害を受け[5]、現在は国と県の助成による災害復旧工事を行っている。本稿では、復旧工事に先駆けて床周りについて行なった実測調査や壊れたことで隠れて見えなかった痕跡があらわれて確認された事項について、大正 2〜6 年の間に増築され[6]、あしべ屋妹背別荘の中で最も大きな空間を有する奥座敷を特に取り上げ詳しく論じてその分析結果を纏める。奥座敷は貴賓館と呼ばれた大正期の姿を決定付ける部分である。

２、あしべ屋妹背別荘の奥座敷の概略

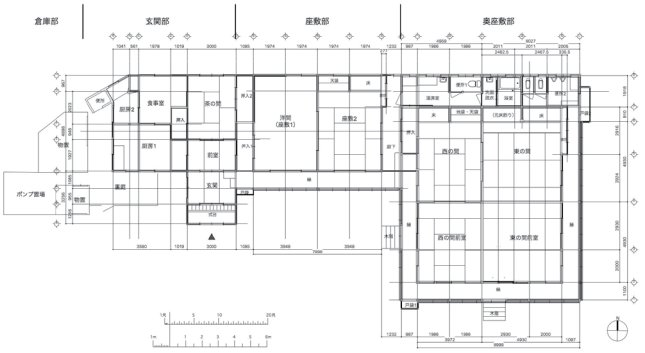


図 1：実測図

復旧工事計画に向けて実測調査を行った結果を平面図（図１）に纏めた[7]。当該建物は、西から倉庫部・玄関部・座敷部と東端の奥座敷部の 4 つからなる。今回の復旧対象は、玄関部・座敷部、奥座敷部である。いずれも石場建てで土葺きの瓦屋根を持つ伝統的構法である。玄関部から奥座敷にかけて床高さが徐々に高く作られており、場所のヒエラルキーが示されている。

奥座敷は最上位の場所で、床は地盤面から約 1500 ミリの高さがある。入側柱筋床下には漆喰風小壁が巡らされるとともに、ほぼ一間おきに床下換気ガラリ窓が設けられて風通しが図られていた。西側床下には間口 4 尺の観音開きの扉があり、被災前は乾いた細砂を敷き詰めた床下は収納として使われていた。今回の台風で発生した高潮により、床下小壁はほぼ全て壊れ、床束の多くも外れた。

写真資料から奥座敷は大正 2〜6 年の間に築造されたことが分かっているが、座敷部東側に付書院が設けられているにも関わらず奥座敷が隣接して配置されたために、ほぼ光の入らない書院となってしまっている。このような点から奥座敷はあしべ屋妹背別荘のために計画されたとは考えにくく、他処からの移築である可能性が高いと考えている。

２−１、工事の来歴

奥座敷の工事の来歴で現在分かっていることはふたつである。昭和 36（1961）年に和歌の浦を襲った第二室戸台風による高潮被害はよく知られているが、あしべ屋妹背別荘にも当時、今回に類似する被害を受けて補修されている痕跡が見つかった。北側外壁のスギ板縦羽目張りが破れたその下に、損壊した古い羽目板が残されていたことは以前に述べた[8]。現在の外壁板張りは第二室戸台風被害の補修工事によるものと推測される。東面床下では束を取り外して床下換気窓の数を増やした痕が見られる。東面の入側柱筋桁材下にのみ補強用の横架材が追加されているのは、束を取り外すための工夫であろう。一連の改変は、束を少なくして高潮時に床下小壁を外れやすく

*1 建築研究所客員研究員　*2 建築研究所客員研究員

するための工夫とも考えられる。堅牢な壁は高潮のエネルギーをまともに受けてしまうが、弱い壁は外れることで水の力を受け流し、構造体への被害を軽微にすることができる。高潮対策をどう考えるかは現在も大きな検討事項である。

もうひとつは昭和 52（1977）年から平成 23（2011）年の間の賃借人による工事である。これまで、東の間とその前室を仕切る鴨居と敷居、床の間と床脇のしつらえが撤去され、床柱と床まわりが新建材でやりかえられていることは確認されていたが、今回の調査で後述のように、西の間脇の押入（図 1）も同じ賃借人による改修であったことが判明した。これまでにも、撤去された床の間の壁張り付け絵が賃借人により天井裏に保管されていたものが見つかっていたが、今回は床脇の部材や敷居、鴨居も新たに見つかり、東の間全体の復元が可能となったことは幸いであった。

２−２、モーヴ（大正藤）

奥座敷の床下は真壁納まりで、露出した柱や桁や束の木部の保護に淡い藤色のペンキが塗られている。大正時代に大流行した、薄い灰色がかった紫色の大正藤の系統に属すると思われる。イギリスの科学者が安政 3（1856）年に発見した世界初の合成染料である mauve（モーヴ）[9]の色が日本でも流行し、大正藤とも呼ばれる。同系色の藤色が大正末期に西本健次郎が築造した旧西本組本社ビル（登録有形文化財 no.30-0042、和歌山市小野町）[10]の建具枠にも塗られている。あしべ屋妹背別荘にはこの他にも北立面を除いて、南面の玄関部では柱梁や板壁にも同様の色が施され、座敷部と奥座敷部では縁桁下の束・柱・地長押に施されているが、縁桁より上には施されていない。塗装は劣化して何度か行われている。塗り分けのルールについて一考を要するが、床下部を意識していることなどから防水性能を期待したものと考えられる。

しかしその色調が伝統的様式とかけ離れていることは明らかで、ここでは雨戸を持たない剥き出しのガラス格子戸と共に、奥座敷が築造された大正期という時代を思わせる点に留意しておく。

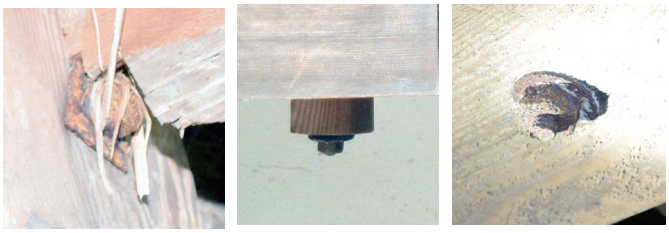
図 2：床下木部表面のペンキ塗り仕上げ

２−３、柱と基礎

柱・梁はトガ材である。中央の柱は四方柾である。柱寸法は 142 ミリ角で、縁の外周部では 135 ミリ角柱なども見られる。柱間は京間であった。基礎は大きく三種類ある。北外壁下の礎石は竜山石の切石で、幅約 220 ミリ、高さ 400 ミリである。西・南・東面の入側柱筋の礎は亀腹様に整形されたモルタル製である。今回、亀腹のモルタルがひび割れ、その中にオリジナルと思われる砂利洗い出し仕上げの一回り小さな亀腹が確認され、現在の亀腹も修復されていたことが判った。建物内部の束石は和泉砂岩[11]や青石[12]の自然石の束石である。大引は再利用材が殆どで、番付が打たれたものも見られた。田の字平面の敷居を支える桁は特に硬い木で、ナグリ痕が艶光りしていた。

２−４、トラスとボルト

主要な接合部にはボルト・ナットによる補強が見られる。柱と桁や横架材との接合や、敷居を床下から固定する引き独鼓の代わりにも使われていた。また高欄の支柱と縁桁の接合にもボルトが使用され、縁桁下面ではナットに木製パッキングが挟み込まれていた。



a. 構造材の引寄せ　b. 木製パッキング　c. 敷居固定

図 3：奥座敷に見られるボルト・ナット

屋根裏を覗くと、梁間約 10 メートルを架け渡す木製キングポストトラスが組まれていた。トラスの真束と陸梁の接合金物や吊束の代わりと思われる長ボルトが見える。トラスは明治初期に外国人建築家によりもたらされ、明治中期には日本の建築家や大工が新しい技術として競って習得した。村松貞次郎は、

「1897(明治 30)年 6 月交付された古社寺保存法にもとづき、関野貞の監督で翌年 5 月修理が開始された唐招提寺金堂および講堂の修理には、その小屋組にトラス小屋を採用し、金物も汎用されているのを見る。（中略）この奈良時代を代表し、わが国の木造建築手法の一面を代表するこの古建築の小屋組にトラスが応用されたということは、新時代を物語るとともに、いかにトラスの小屋組みが信頼されていたかを物語るものである。」

と述べている[13]。

大正 2（1913）年に完工した東大寺金堂修復工事では、より大掛かりに鉄骨トラスが採用される。奥座敷がこの地に移築されたと推測される大正 2〜6 年当時は、日本の木造にトラスや鉄を使う工法が展開し始めた頃と考えられる。あしべ屋妹背別荘は旅館であり、社寺建築とは比

較し難いが、全体意匠は伝統的な様式を守りつつ、見えない部分に新しいトラスの技術を取り入れて、細くて少ない柱で開放的な大きな空間を作ることに成功しており、計画には相応の知識を持つ作り手が関わっていたと思われる。ガラス窓は一本引きである。縁桁の外に足した敷居となる別部材の天端に金属レールを設置している。敷居部材の外側にはさらに化粧薄板が張られているが、その薄板を固定する留め具の丸頭に、微かに一文字の溝があり、ネジ山であると思われる。

金属部材に関してはその他、柱脚のところどころに鉄板の敷き込みがなされるというあまり見かけない処置が見られた[14]。

図 4：柱脚の鉄板

２−５、瓦

屋根仕上げは、土葺きの上に桟瓦である。床下から見つかった棟瓦に「泉州、谷川瓦製産組合　製造人辻下久治郎」と刻印がされていた。軒部に使用された瓦には異なる刻印も観察されている。

a. 棟瓦

b. 瓦の刻印部拡大

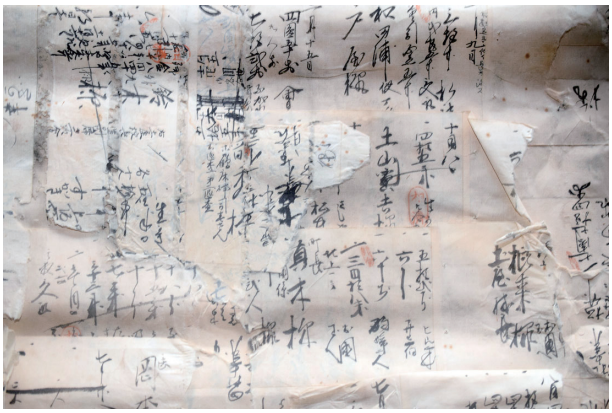
図 5：奥座敷の瓦

３、壁貼り付け絵の裏張に見る文字史料（図 6）

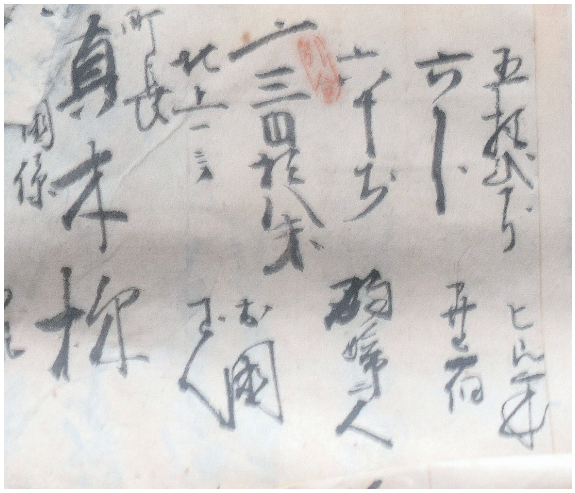
2017 年、奥座敷天井裏から東の間の床の壁から剥がされて失われていた壁張り付け絵が見つかり[15]、その裏張りにあしべ屋の古い帳簿が使われていた。表面の絵画と同様に、裏面も地方史の史料として貴重である。今回、書き込まれた人名から分かった点を述べる。

「町長貞木」と書かれたのは、和歌山県海草郡誌により、和歌浦町長の貞木美成と思われた。その任期は明治 37（1904）年 9 月 29 日から明治 41（1908）年 9 月 28 日[16]である。「校長土屋」と書かれたのは、同じく和歌山県海草郡誌により、和歌浦尋常高等小学校の第 4 代校長の土屋章と思われた。その任期は明治 34（1901）年 4 月 30 日から明治 40（1907）年 10 月 31 日であった。任期を終えた後も同じ肩書で呼ばれたかもしれない点は留意しておくべきであろう。

荒五という文字も頻出する。また荒五別荘の文字も見られる。荒五は関西歌舞伎の名跡である市川荒五郎の愛称であった可能性がある。貞木や土屋の任期を考え合わせると、明治 30 年代後半には敵役として人気を得ていた四代目市川荒五郎がいる。荒五別荘という表現に関しては今後より細かな検討を重ねたい。



a. 裏張りの一部



b. a の部分拡大写真

図 6：壁張り付け絵の裏張りに使われた帳簿（部分）

裏張りに使われた料紙の大きさを実測して図 7 に整理した。幅が 1 尺 2 寸 5 分（380 ミリ）、高さが 9 寸（268 ミリ）の紙を二つ折りにしたと思われる。左手に約 2 寸（58 ミリ）の間隔で穴が開けられている。この穴に紐を通して綴じたのであろう。

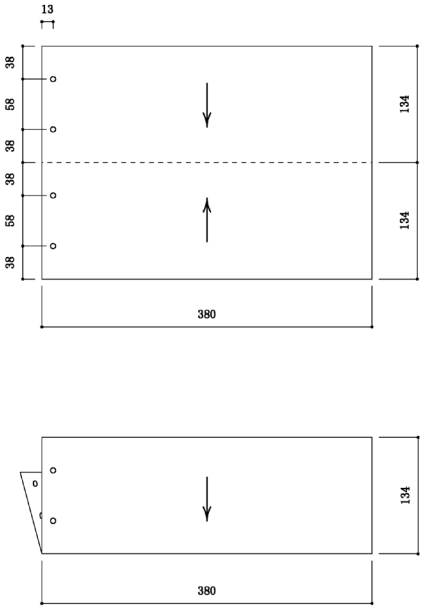


図 7：裏張りに使われているあしべ屋の帳簿の寸法
（矢印は文字の向きを示す）

4、大正期の姿

奥座敷の増築（移築）当初の姿を図 8 にまとめた。北側の間仕切り壁位置は改変が激しく、確定が難しい。この領域が水回りであったことは後述する。

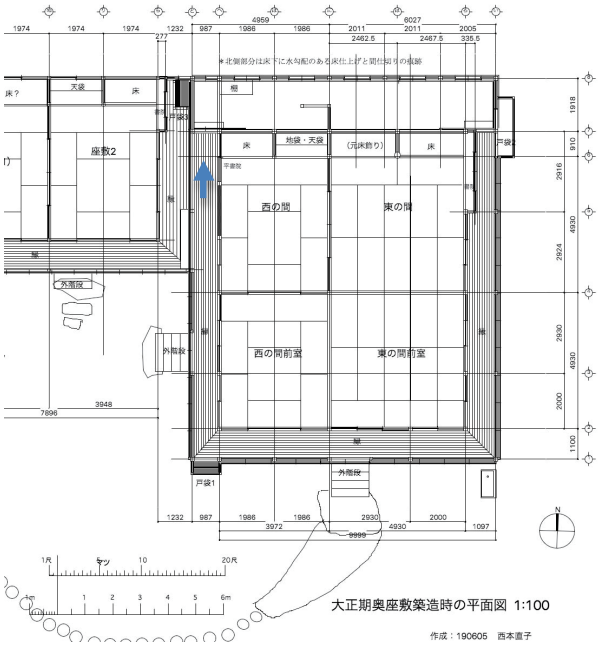


図 8：大正期築造時の平面図

4−1、三方の縁

あしべ屋妹背別荘の縁は幅 90 ミリの縁甲板を下面から特殊釘で留める丁寧な仕事である。奥座敷西面にある押入（図 1）の床下に、縁甲板と特殊釘が確認され、当初は押入ではなく縁が周っていたことが了解された。縁甲板にノコギリの目の痕が見える。縁であったことは押入の柱に見られる高欄の仕口の痕跡とも符合する[17]。

図 9：縁の裏側に打たれた特殊釘（黄線筆者）

4−2、梅戸在貞による杉戸絵

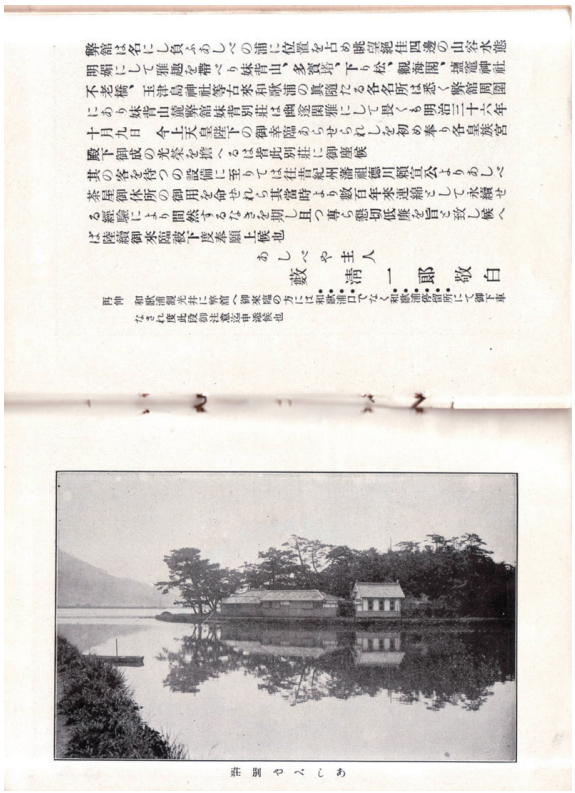
西の間脇の押入に改変された部分から、竹に雀の図が描かれた杉戸絵が発見された（図 8 矢印）。北側の便所や洗面のある場所への入り口にあたり、青竹の清廉さと、スズメの姿が心を和ませたであろう。戸は陽に当たらない状態で置かれていたこともあり保存状態が良い。奥座敷西の間床脇の壁張り付け絵と同様、大正天皇の絵師であった梅戸在貞の手によることが落款により判明した。また和歌山県立近代美術館・藤本真名美学芸員により、在貞が「麒麟凰」の雅号を用いていることから、杉戸絵は大正 4（1915）年以降の作品と判定された[18]。

a. 落款

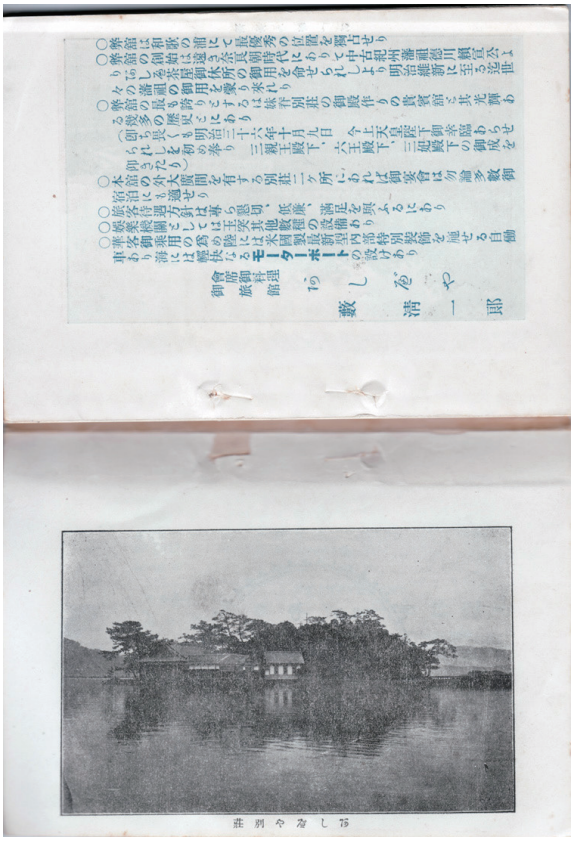
b. 杉戸絵全体写真

c. 杉戸絵部分、竹に雀

図 10：梅戸在貞による杉戸絵



a. 大正 2 年のあしべ屋の広告のあしべ屋妹背別荘



b. 大正 6 年のあしべ屋の広告のあしべ屋妹背別荘

図 11：観光パンフレット「和歌浦遊覧の友」

あしべ屋妹背別荘は皇族や宮殿下を何度もお迎えしたことが知られる[19]。皇太子におかれては明治期と大正期に少なくとも 1 度ずつ御幸があり、まず明治 36（1903）年に後の大正天皇をお迎えし、妹背山にはその記念碑がある。和歌山市の医師・郭嘉四郎は当日のあしべ屋妹背別荘の様子を日記に書き残している[20]。その後もあしべ屋妹背別荘は皇族の休憩所に使われた。観光パンフレット「和歌浦遊覧の友」の初版にあたる大正 2（1913）年版のあしべ屋妹背別荘の写真には、奥座敷の姿はなく、大正 6（1917）年版では奥座敷の姿が写真で確認できる。この時あしべ屋妹背別荘は御殿造りの貴賓館と紹介されている[21]。大正 11（1922）年に、後の昭和天皇のご光臨を授かる[22]。登記簿によればしかし、同年に、当該建物はあしべ屋から西本健次郎に譲られており、滝上巨志の「皇室と紀州」では、あしべ屋の文字はなく、妹背別荘と称されている。

今回の杉戸絵の発見は、奥座敷が皇族をお迎えする場所として設えられていたことを改めて明瞭に示した。西の間の襖の引手には葵の御紋が見られるが、再利用の可能性も疑われる。

４−３、東の間の床脇部材

図 12：発見された東の間の床脇の部材

壁張り付け絵が収められていた天井裏から、さらに東の間の床脇の部材が天井板を含めてほぼ全て見つかった[23]。一度着彩した上に漆塗りで仕上げられている。壁貼り付け絵のための黒漆塗りの押縁も見つかった。実測とともに痕跡を記録する作業を進めているところである。

４−４、北東隅柱の劣化補強と北側床下の水回り遺構

奥座敷は全体に北東側に傾きが生じていた。内海に浮かぶ島である妹背山は、岩礁に人工的な造成を施して平地を広げている。島の縁に近い敷地北側は、江戸期の造成地の可能性もある。敷地北東側の地盤がやや下がっていることも分かったが、昨年の高潮被害にも地盤は荒れることがなく、傾いた部分についても安定していると判断された。

2019 年 10 月に柱の不陸調整を進めたところ、北東隅柱頭に傷みが見つかった。古い蟻害の跡があったことは注意されるべきであろう。さらに北東隅の柱頭周囲の軒裏に、瓦下地の土が溶け出た白いシミが見られて雨漏りの痕跡と思われたので、天井裏を開けて確認したところ、土居桁が、北東隅柱周辺で梁間方向と桁行方向ともに隅部で取り替えられ補修されていた。当初の土居桁は幅 5 寸、成 8 寸のツガの良材であるが、切り取られた断面に腐れがあり、雨漏りで腐朽して補修されたと思われる。2012 年当時から雨漏りはないので、それ以前に行われた補修である。桁行方向は金輪継を取り外して、成 5 寸の別材を重ねて補修されていたが、梁間方向は、土居桁を隅から一間ほどで切断して、替え部材を腰掛け継と鎹で継いでいた。北東隅柱の蟻害は収まっていたが傷みがあり交換が望ましい。しかしそのためには広範囲に屋根瓦をはずし、柱周辺の土壁を大きく壊す必要があり、土壁の修復には多大な費用と工期が必要となる。今回の復旧工事では実施が困難であると判断された。そこで既存土居桁より四寸幅広の横架材を新たに残された土居桁と接合させて、その横架材を支える四寸角柱 3 本を新たに立てる方法が取られた（図 13）。

3 本柱の無筋モルタル基礎を形成するために床をめくったところ、排水溝などの造作がみつかった。基礎の無筋モルタルは、予めビニルシートを敷き込んだ上にモルタル打設して原状復帰が可能となるように図った。

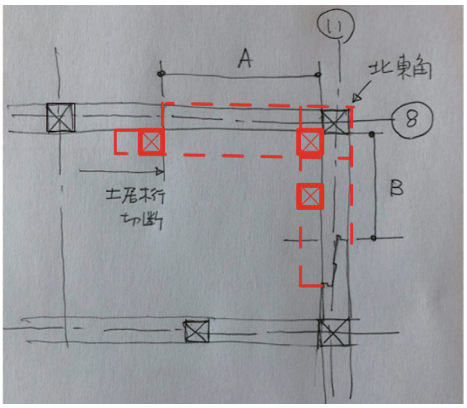


図 13：北東隅柱まわりの土居桁補修

当初の壁位置を特定することは困難であるが、奥座敷北側に見つかった排水設備の痕跡から、北側には現在と同じく便所や浴室や手洗いが配置されていたことが判明した。被災直前の浴室は昭和後期の賃借人が作ったものであったが、その浴室の下に、賃借人の浴室には使われていなかった白いタイルの破片が見られた。西本健次郎の孫で昭和 20 年代の住人が、当時、北側に使われていない浴室があったと話しており、浴室は築造当初から図 1 の位置にあった可能性が考えられる。図 14 の斜線部は水勾配を形成したモルタル製床である。西側（と通り側）の杉戸絵のある入り口から入ってすぐに最も大きなモルタル床面があり、排水口と思われる穴に向かって水勾配

が設けられている。聞き取りからこの場所には洗面所と小便器があったとのことであり、スノコ状の床を設けて使用していたと考えられる。埋め込まれた２個の瓶は便槽と考えられ[24]、便所空間であったことが再確認された。ほ通りあたりから東に向けて作られている側溝様のしつらえは、小便器のための溝と考えられ、証言とも符合する。現場床下からは小便器の前に置く青磁の履物も見つかった（図 15）。

興味深いのは瓶のサイズが、西側は直径 710 ミリであるのに対して東側は 565 ミリと小さい点である。聞き取りによると先述の小便器の奥に仕切られた大便器があり、その奥の仕切りにもう一つ大便器があり、その床は畳敷きであった。格上の畳敷きの便所は賓客の用途に限られていたために便槽も小さくしたことが考えられる。よく見れば小さい瓶にも側溝様の溝が付属しており、ここにも小便器が設けられていた可能性がある。聞き取りのように一般の便所と畳敷きの便所が一つの動線で繋がっていたとすれば、格上の便所の入り口と小便器の位置についてはさらに検討をする必要がある。

基礎石について 7 通りの延石は古い砂岩と見られる。留意されるのは、7 通りの端部のへ通りと、い通り・ろ通り間は延べ石ではなく、自然石で、古い作りが残されている。

東側の平面は浴室があったこと以外に情報が少ない。畳敷き便所は賓客のための浴室と組み合わせて東側から入るように作られていたことも考えられるが、脱衣場についてなど不明であり、検討を要する。奥座敷の付書院が出入口の間口は狭められている点も気になる。は通りあたりに靴脱ぎ石らしき石が置かれている点は留意される。

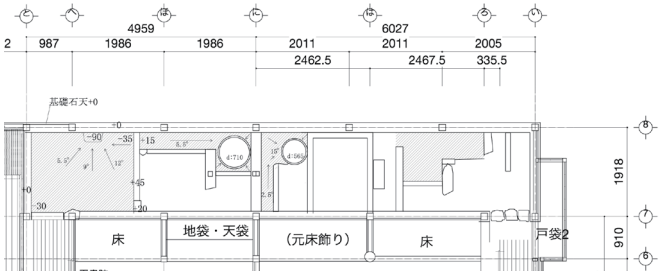


図 14： 水回りの遺構

図 15：床下から見つかった陶器製履物

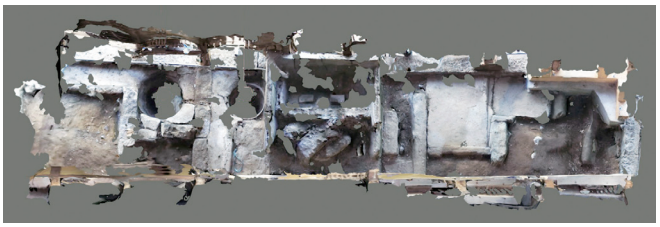


図 16：フォトグラメトリによる３D 画像
（使用機材）ZED STEREO LABS、（使用ソフト）blender

図 16 は動画を使ったフォトグラメトリによる記録を試みたものである。短時間の撮影であったが便槽の瓶などが読み取れる。

５、まとめ

あしべ屋妹背別荘の建物において最上位の場所である奥座敷は、大正期の移築時には三方に縁がまわり、床の間の背面に洗面所や浴室の水回りを備えた建物であった。水回りの入口には大正天皇に寵愛を受けた梅戸在貞が竹と雀を描いた杉戸絵を配していたことも判明し、縁と高欄が回る御殿造りの奥座敷が、皇族の御来臨を念頭においた施設であることが改めて確認された。奥座敷が現在の場所に築造されたと推測される大正 2 年から 6 年は建築家も大工もトラスを学び、活用し始めた時期である。伝統的意匠に最新の技術を用いて広々した空間を作り得るには、相応の造り手が必要であったと推測される。座敷部東面の付書院と奥座敷部の収まりの不自然さと共に、奥座敷増設の経緯については今後も留意する必要があろう。次稿においては災害復旧計画について纏めることとしたい。

図版出典

作図と図 2,3,4,9,10,12,13,15 は西本直子、図 5,6,11 は西本真一、図 16 は西本耀による。

参考文献

四友会「和歌浦遊覧の友」帯伊書店、1913 年。

滝上巨志「皇室と紀州」和歌山大公論社、1922 年。

「社会画報　多額議員選挙特別号」和歌山社会画報社、1925 年秋。

土井林之助「和歌浦遊覧の友」帯伊書店、1917 年。

奈良県文化財保存事務所「国宝東大寺金堂（大仏殿）修理工事報告書」東大寺大仏殿昭和大修理修理委員会、1980 年。

奈良県教育委員会事務局/文化財保存事務所「国宝唐招提寺金堂修理工事報告書」奈良県教育委員会、2010 年。

西本真一・西本直子「旧西本組本社ビル」武蔵野大学環境研究所紀要 2、2013 年、pp. 95-104。

西本真一・西本直子「和歌の浦『あしべ屋』の増改築の過程」武蔵野大学環境研究所紀要 3、2014 年、pp. 99-115。

西本真一・西本直子「和歌の浦『あしべ屋』を巡るその他の史料」武蔵野大学環境研究所紀要 5、2016 年、pp. 105-112。
西本真一・西本直子「『旧西本組本社ビル』を巡るその他の史料」武蔵野大学環境研究所紀要 6、2017 年、pp. 27-32。
西本真一・西本直子「あしべ屋の挨拶状とその他の史料」武蔵野大学環境研究所紀要 7、2018 年、pp. 181-190。
西本直子「旧西本組本社ビルの建造年代について」日本建築学会大会講演梗概集 F 分冊、2013 年、pp. 921-922。
西本直子「歴史的建造物保存：和歌の浦・あしべ屋妹背別荘 2015 年現在」伝木 31、2015 年、pp. 4-5。
西本直子「近代の妹背山：あしべ屋妹背別荘について（明治大正期を中心に）」名勝和歌の浦・玉津島保存会編『文化財担当者と学ぶ、名勝和歌の浦』玉津島保存会、2016 年、pp. 89-99。
西本直子・西本真一「和歌浦『あしべ屋別荘』と夏目漱石」武蔵野大学環境研究所紀要 2、2013 年、pp. 77-93。
西本直子・西本真一「旧西本組本社ビルの建造年代と平面の分析」武蔵野大学環境研究所紀要 3、2014 年、pp. 117-132。
西本直子・西本真一「大正期の旧西本組本社ビル：その鉄道工事記録など」武蔵野大学環境研究所紀要 5、2016 年、pp. 91-104。
西本直子・西本真一「和歌の浦『あしべ屋』と『妹背別荘』巡るその他の史料」武蔵野大学環境研究所紀要 6、2017 年、pp. 33-46。
西本直子・西本真一「和歌の浦の妹背山を巡る史料」武蔵野大学環境研究所紀要 7、2018 年、pp. 163-179。
西本直子・西本真一「旧西本組本社ビルとあしべ屋妹背別荘の台風 21 号被害」武蔵野大学環境研究所紀要 8、2019 年、pp.79-89。
日本建築学会編「新版日本近代建築総覧」技報堂出版、1983 年、p. 341。
日本建築学会編「総覧日本の建築第 6-II 巻、奈良：和歌山」新建築社、2002 年、p. 254。
浜口弥編「新和歌浦と和歌浦」枇榔助弥生堂、1919 年。
文化庁文化財部編「総覧登録有形文化財建造物 5000」海路書院、2005 年、pp. 119；270。
源愛日児「木造軸組構法の近代化」中央公論美術出版、2009 年。
村松貞次郎「日本近代建築技術史」彰国社、1976 年。
森川昭「明治 7 年の旅」帝京大学文学部紀要「日本文化学」41、2010 年。
山崎幹泰「明治前期社寺行政における『古社寺建造物』概念の形成過程における研究」学位論文、早稲田大学、2003 年。
和歌山県教育委員会編「和歌山県の近代化遺産：和歌山県近代化遺産（建造物等）総合調査報告書」和歌山県教育委員会、2007 年、口絵、pp. 204-205；246。
和歌山県教育委員会「和歌の浦学術調査報告書」和歌山県教育委員会、2010 年。
和歌山県文化財センター「重要文化財　琴ノ浦温山荘浜座敷ほか二棟　修理工事報告書」財）琴ノ浦温山荘、2015 年。
「旧西本組本社ビル」、和歌山県建築士会 HP、http://www.wakayama-aba.jp/isan_meguri/1197.html 、閲覧：2018 年 10 月 31 日。

---

[1] 名勝は、美しい自然景観や名所的な学術的価値のある景観と、人文的、芸術的、学術的価値の高い国土美があるとして国が指定した場所である。和歌の浦は 2016 年に名勝指定されたが、自然景観の美のみではなく、そこに配された橋や建物の人工物も共にその学術的名所的価値を認められた景観で、全国でも両方を併せ持つ名勝は決して多くはない。

[2] あしべ屋には 3 つの別館があった。区別するためにも本稿では当時の呼称であるあしべ屋妹背別荘を使用する。

[3] 名勝和歌の浦申請時の名称。

[4] 西本・西本;「和歌浦『あしべ屋別荘』と夏目漱石」武蔵野大学環境研究所紀要 2、2013 年;「和歌の浦『あしべ屋』の増改築の過程」武蔵野大学環境研究所紀要 3、2014 年;「和歌の浦『あしべ屋』を巡るその他の史料」武蔵野大学環境研究所紀要 5、2016 年;「和歌の浦『あしべ屋』と『妹背別荘』巡るその他の史料」武蔵野大学環境研究所紀要 6、2017 年;「和歌の浦の妹背山を巡る史料」武蔵野大学環境研究所紀要 7、2018 年;「あしべ屋の挨拶状とその他の史料」武蔵野大学環境研究所紀要 7、2018 年;「旧西本組本社ビルとあしべ屋妹背別荘の台風 21 号被害」武蔵野大学環境研究所紀要 8、2019 年;「歴史的建造物保存：和歌の浦・あしべ屋妹背別荘 2015 年現在」伝木 31、pp. 4-5、2015;「近代の妹背山：あしべ屋妹背別荘について（明治大正期を中心に）」名勝和歌の浦・玉津島保存会編『文化財担当者と学ぶ、名勝和歌の浦』玉津島保存会、2016 年、pp. 89-99。

[5] 西本・西本「旧西本組本社ビルとあしべ屋妹背別荘の台風 21 号被害」武蔵野大学環境研究所紀要 9、2018 年。

[6] ガイドブックの写真によるので、実際に建立された時期よりも掲載の時期が遅れる場合も考えられる。西本・西本「和歌の浦『あしべ屋』を巡るその他の史料」武蔵野大学環境研究所紀要 5、2016 年。

[7] 実測調査は着工前に次の 4 回行われた。2019 年 4 月 16～19 日、調査員：鳴海祥博（文化財建造物保存修理技術者）、高橋政則（有限会社高橋建築工房代表取締役）、西本真一、西本直子；2019 年 5 月 19～20 日、調査員：鳴海祥博、高橋政則、西本真一、西本直子；2019 年 6 月 23 日、調査員：鳴海祥博、西本真一、西本直子；2019 年 8 月 17 日、調査員：鳴海祥博、西本真一、西本直子。着工後も随時調査を行っている。

[8] 西本・西本「旧西本組本社ビルとあしべ屋妹背別荘の台

風 21 号被害」武蔵野大学環境研究所紀要 8、2019 年。
[9] モーヴはマンセル値：5P 4.5/9。
[10] 文化庁文化財部編「総覧登録有形文化財建造物 5000」2005 年ほか。
[11] 妹背山に紀州徳川初代藩主・頼宣が築造した三断橋や、多宝塔の石柵に使われた石と同じである。
[12] 紀州青石と呼ばれる緑泥片岩は、和歌の浦でよく見られる。妹背山を含め、和歌浦中には緑泥片岩の巌山が良く見られる。明るい緑色で硬い。
[13] 村松貞次郎「日本近代建築技術史」p. 82。
[14] 柱脚に鉛を敷き込んで腐朽を避ける方法がある。鉄を用いた意図はまだ判明していないが、試行錯誤の使い方かもしれない。既に酸化して脆くなっており、可能な箇所では取り去る方針である。
[15] 西本・西本「和歌の浦の妹背山を巡る史料」2018 年。あしべ屋妹背別荘の絵葉書に見られる東の間の床の姿には壁貼り付け絵がみられないことから、築造されてから東の間に壁貼り付け絵が設えられるまでに時間があったことが考えられる。西本・西本「和歌の浦『あしべ屋』と『妹背別荘』巡るその他の史料」2017 年。
[16] 和歌山県海草郡役所『和歌山縣海草郡誌』和歌山県海草郡役所、1926 年、p. 704；和歌浦尋常高等小学校『開校六十周年史』和歌浦尋常高等小学校六十周年史、1936 年、pp. 30-31。和歌山県立図書館・足立様にご教示いただいたことに感謝申し上げたい。
[17] 西本・西本「和歌の浦『あしべ屋』を巡るその他の史料」2016 年。
[18] 梅戸在貞は大正天皇に寵愛された画家で、大正天皇の即位のために用意された高御座浜床に描いた鳳凰と麒麟の図が最もよく知られている。大正 4 年の大正天皇即位で揮毫した記念に麒麟凰の雅号を使うようになった。高御座は天皇の玉座であり、永らく茵（しとね）であったが大正期より椅子となっている。
[19]浜口弥編「新和歌浦と和歌浦」1919 年、p. 25。
[20] 西本・西本「和歌の浦『あしべ屋』と『妹背別荘』巡るその他の史料」2017 年。
[21] 四友会「和歌浦遊覧の友」1913 年；土井林之助「和歌浦遊覧の友」1917 年。
[22] 滝上巨志「皇室と紀州」1922 年。
[23] 海老束が不足している。
[24] 後日、昭和 20 年代中頃から約 10 年居住していた初代西本健次郎の孫の菅谷恵子氏、堀田洋子氏からの聞き取りによれば、西の入口から北側の水回りの領域に入るとすぐ手洗いと小便器があり、その奥に家族用便所と、それとは別に日頃使わない畳敷きの和式便所があったという。北側の水回り領域の東側には使われない浴室があったらしい。手洗いと便所に関しては、昭和 30 年代に数年居住したことのある、菅谷・堀田両氏の兄嫁・西本和子氏にも同様の記憶があった。